

## [参考資料] 横浜市における生物多様性の現状と課題

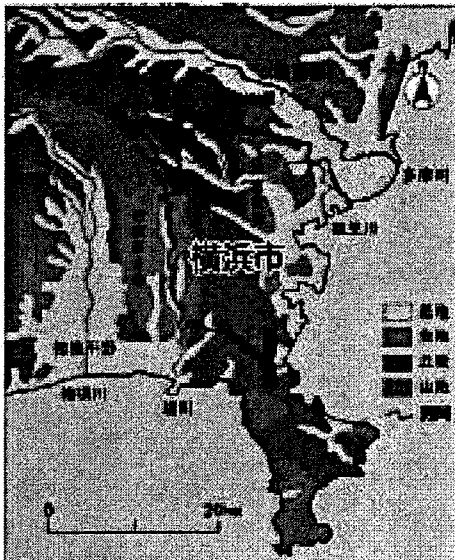
### 1 横浜市の地勢・土地利用

横浜市は368万の人口を有する大都市ながら、郊外部を中心に、市民の身近な場所にまとまりのある樹林地や農地が分布しており、起伏に富んだ地形から、変化に富んだ豊かな自然環境も残されていることが特徴です。

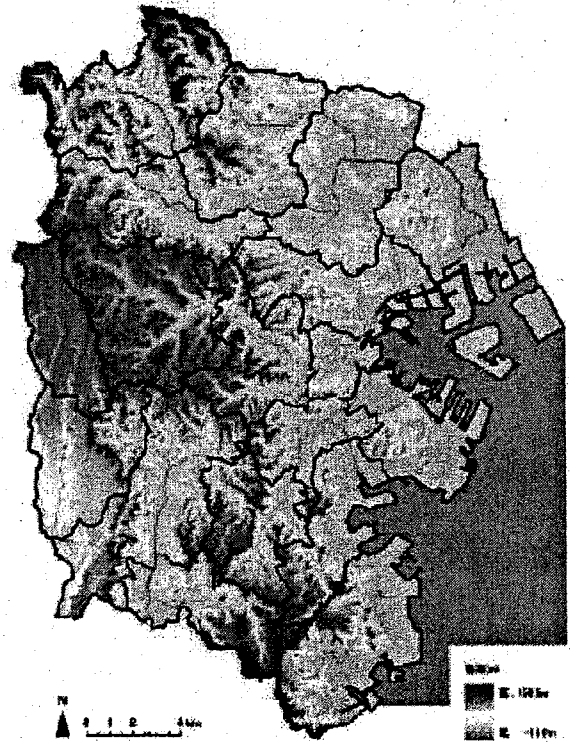
2009年時点での、市域の緑被率は29.8%となっており、また、農地は市域面積の約7.5%で、野菜や果樹、畜産など非常にバラエティに富んだ農業が営まれています。

#### (1) 地形の特徴 ～谷戸～

市内は北部が多摩丘陵に南部が三浦丘陵に位置し、市域の約7割を丘陵・台地が占め、谷戸と呼ばれる地形が樹枝状に広がっています。この結果、丘陵や段丘、谷戸が複雑に入り組んだ地形となっているのが特徴です。



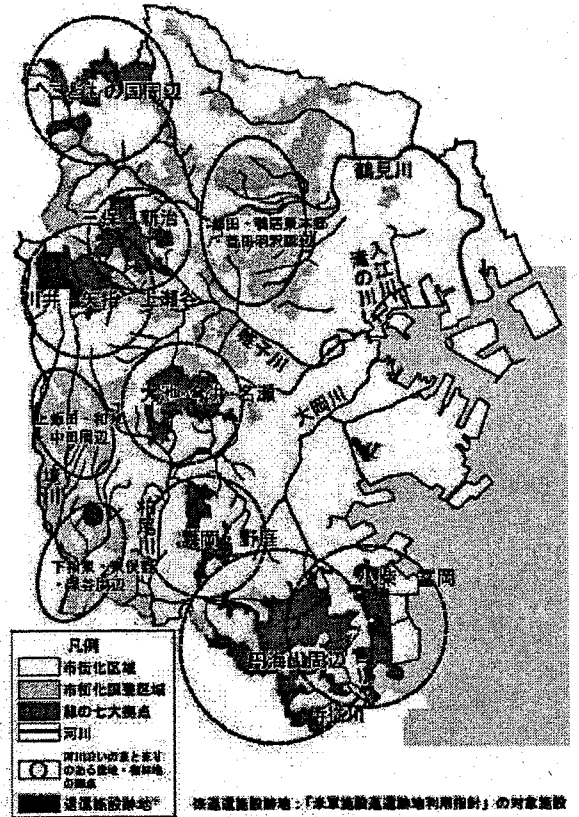
■図 横浜周辺の地形  
(「日本の地質3関東地方」共立出版株式会社1986)



■図 横浜の地形  
(慶応義塾大学石川研究室提供)

## (2) 横浜の緑 ～緑の10大拠点～

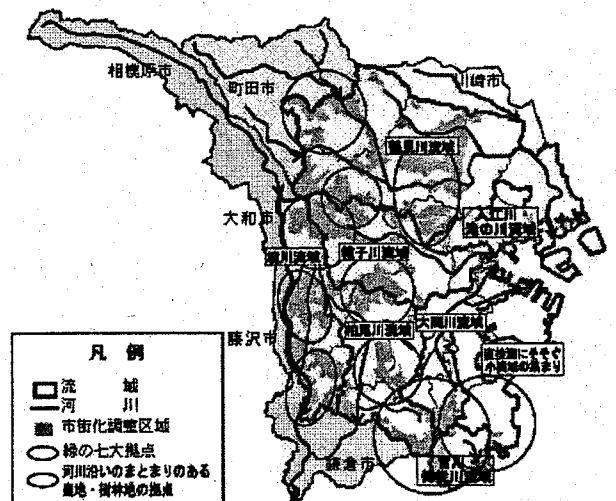
市内にはまとまりのある緑地として、市内主要河川の源流域に「緑の七大拠点」(こどもの国周辺地区、三保・新治地区、川井・矢指・上瀬谷地区、大池・今井・名瀬地区、舞岡・野庭地区、円海山周辺地区、小柴・富岡地区)と、鶴見川や境川の中流域の「河川沿いのまとまりのある農地・樹林地の拠点」(都田・鴨居東本郷・菅田羽沢周辺、上飯田・和泉・中田周辺、下和泉・東俣野・深谷周辺)3か所が分布しています。これらを合わせて「緑の10大拠点」と呼んでおり、生物多様性の保全の観点からも重要な場所となっています。一方、都市部にも斜面緑地や社寺林、都市公園、道路及び工場地帯などに僅かに残された緑地が分布しています。



■図 緑の10大拠点  
(横浜市水と緑の基本計画より)

## (3) 流域 ～市内で完結する5流域～

市内には、東京湾に鶴見川、帷子川、入江川・滝の川、大岡川、宮川・侍従川がそそぎ、また、相模湾に境川とその支流柏尾川がそそいでいます。この中で鶴見川流域と境川流域、柏尾川流域を除く、5つの流域(入江川・滝の川流域、帷子川流域、大岡川流域、宮川・侍従川流域及び直接海にそそぐ小流域の集まり)は、横浜市内で完結した流域となっています。



■図 横浜にある8つの流域  
(横浜市水と緑の基本計画より)

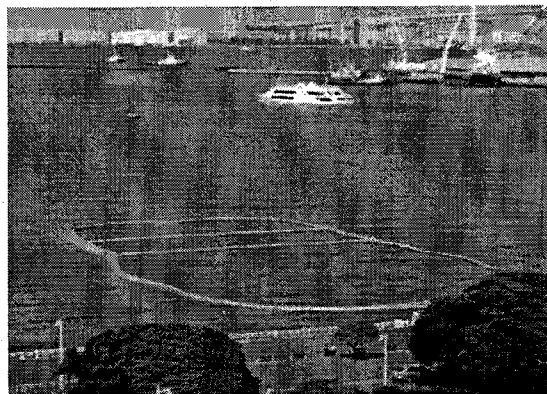
#### (4) 海

横浜市の東京湾沿岸のほぼ全域に広がる横浜港は、コンテナポート、そしてクルーズ客船の発着港として東日本を代表する港となっています。

沿岸部はほぼ埋立地となっており、残された自然海岸は、野島地区の約 500mとなっています。そのため、人口の砂浜がある海の公園（金沢区）のような市民が海と親しめる場所はあまり多くありませんが、近年は市民によるアマモ場の再生や、横浜市による山下公園前での水質浄化実験（きれいな海づくり事業）などの取組が進められています。



アマモ



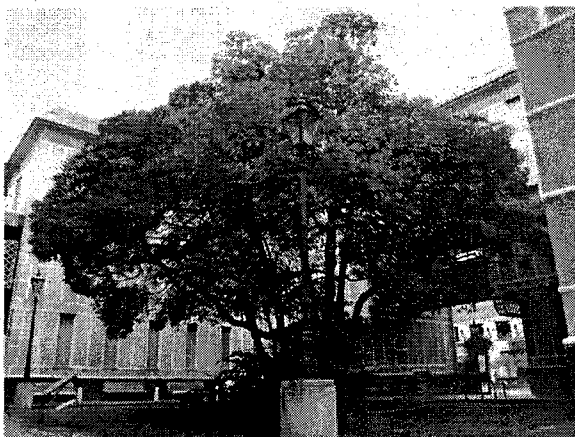
山下公園前での水質浄化実験

#### (5) 横浜の植生

横浜の自然植生は、スダジイ、タブノキ、シラカシなどの常緑広葉樹からなる林が最も代表的ですが、市域に占めるそれらの面積は小さく、大部分は人為の影響を受けています。現在の代表的な植生としては、コナラ、クヌギ、エゴノキなどの落葉広葉樹からなる林が挙げられます。

つまり、横浜の樹林地は、人々が薪や炭をつくるための薪炭林など、人が自然と共同で作りあげてきたことによるものなのです。

また、こうして形作られた環境の中に、気候や地史を反映した「里山を代表する植物」といえるカタクリやカントウカンアオイなどの植物も分布しています。



横浜開港資料館の中庭にあるタブノキ(通称:玉楠)



里山の代表的植物 カントウカンアオイ

(6) 緑被分布の状況

■図 緑被分布図

(横浜市第9次緑地環境診断調査(平成21年度)より)



凡例  
 樹林地  
 農地  
 草地  
 区界

この図は数値地図25000(地図画像)  
 (国土交通省国土地理院)を使用して作成した

0 0.5 1 2km

Scale=1:90,000



平成 21 年に実施した「緑の総量調査結果」によると、横浜市における緑被分布は、樹林地が 7,569ha、農地が 2,815ha、草地在 2,588ha で、市域の緑被率は 29.8%となっています。

■表 「緑の総量調査結果」(平成 21 年実施)

	市域面積 (ha)	緑被地面積 (ha)				緑被率 (%)
		樹林地	農地	草地	合計	
平成 21 年 調査結果	43,560	7,569	2,815	2,588	12,972	29.8

\*300 m<sup>2</sup>以上の緑のまとまりを対象としています。

### (7) 農地

農地面積は市域全体の約 7.5%を占めており、その内訳は畑が 92%、田は 8%という状況です。横浜の農業はバラエティに富んでおり、野菜だけでなく、果樹に花き、植木などを生産し、畜産も行っています。生産額は神奈川県内でトップクラスとなっており、横浜市は全国でも例を見ない農地と住宅地が混在した都市といえます。

農地は地下水を涵養し、河川に安定的に水を供給する大切な役割があります。また、特に水田については、カエル、トンボ、水鳥など、様々な生き物にとって大切な生息場所にもなっています。



キャベツ畑 (神奈川区菅田町)



直売所 (保土ヶ谷区)



水田 (青葉区寺家町)

## コラム 本来の生物相と土地利用の変遷～人と自然の関わり～の歴史～

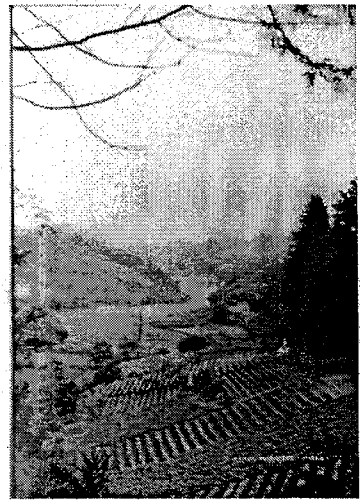
### ・陸域

横浜の地形の特徴である谷戸地形は、約2万年前に形成され、その後約6,000年前に縄文海進によって今日の沖積低地が形成された。そのころは、谷底面にはアシ原、斜面はシイ、タブノキ、カシなどの常緑広葉樹林が広がっていたと推定されている。

その後、紀元前後（弥生時代中期後半）に入り、鶴見川、大岡川、柏尾川及び帷子川流域などの低地で新田開発が始まった。新田開発が進むと、アシ原の谷底面の人為的な谷戸田化はもとより、谷戸をとりまく樹林帯への刈敷き、薪炭、茅、農機具材の需要も高まり、それまでの常緑樹林帯に人手が入り、いわゆる雑木林といわれる二次林が形成された。横浜における谷戸地形の本格的な二次自然化すなわち生物相の豊かな谷戸生態系としての形成は、成立が近世（江戸時代）に行われたものと推定されている。また、江戸時代には市域の山林で伐採された薪は、宿場に集荷された後、江戸に送られていた。

この江戸時代には、現在の横浜では想像が出来ないが、ニホンジカやイノシシなどの大型獣をはじめとして、国産としては絶滅したトキやコウノトリも生息していたとされている（横浜市教育委員会/かながわ検定協議会（編）2009わかるヨコハマ 神奈川新聞社）。これらの動物がいなくなってしまうのは、幕末以降に都市化が進み、人口が増加した結果、動物の生息環境が失われたこと及び過度な狩猟が行われたことが主な原因とされている。

太平洋戦争後は、首都圏の一角として開発が進み、急速に緑地や水田が失われ、野生生物の減少の度合いが一層顕著となった。特に東京オリンピック（1964（昭和39）年）開幕に向けた東海道新幹線や東名高速道路の建設など交



谷戸の景観（都筑区荏田東）1971年

通網の整備が進められたことで、樹林地や田畑の面積が減少し、横浜の自然環境はさらに大きく衰退した。産業面においてもエネルギー革命（燃料革命）によって燃料が石油にとってかわり、里地・里山の雑木林（薪炭林）が経済的価値を失った。同時に、農業技術の発展に伴い、市内に残された水田に農業を散布したことも、水田に残っていた水生生物等を減少させる原因の一つとなった。また、産業構造の変化に伴い、農業の担い手が工業や商業に流出し、里地・里山の管理がなされなくなった。

このような社会変化や人と里地・里山のつきあい方の変化により、1970年に約50%だった市域に占めるみどりの割合は、2010年には約30%にまで減少した。



現在も残されている里山風景（舞岡ふるさと村）

・ 海域

海域の生物多様性を保全していく上で重要な場である横浜の干潟は、埋立によりその姿を変えてきた。横浜の埋立は江戸時代にまでさかのぼり、明治時代に港湾施設や工業用地等の新たな開発が本格化した。

横浜の沿岸域は海苔の養殖が盛んであったことから遠浅の海域が拡がり、魚の産卵場であるアマモが茂っていたと考えられるが、現在は野島海岸を除くほとんどが埋立による人工海岸となっている。この結果、アマモ場もほとんどが消滅し、海洋生物の種類が減少している。

これにより、「海の恵みを受ける漁場としての場」から「加工貿易の運搬等に船舶を利用する場」へと人と海域の関わり方も大きく変化した。



海苔養殖（小柴）1970年

## 2 横浜市における生き物の現状

横浜は、日本のほぼ中心の太平洋岸に位置しており、また丹沢山地や箱根火山のように標高 1,000m を超えるような地域もないことから、温帯の平地から低山地に生息する種が中心となっています。

1997（平成9）～1998（平成10）年度に実施した「横浜市陸域の生物相・生態系調査」以降、市域全体を対象にした陸域生物調査は行われていませんが、市内の河川・海域においては、3年おきに定期的な調査を行っています。また、企業や市民活動団体などが、それぞれの活動場所において定期的な調査も行っています。

このように近年、市域全体を対象にした体系的な調査は行われていないため、現在の横浜市域全体における生物の生息・生育状況は正確には分かっていませんが、過去の調査から、以下のようなことが言えます。

### (1) 陸域の生物

「横浜市陸域の生物相・生態系調査（1991年）」において、確認種数は全体で1,046種となっています（別表。聞き取り調査による確認種を除く。以下同様）。このうち、全体の7割を超える796種が樹林地で確認されています。また、市街地（緑の多い住宅地を含む）においても全体の5割を超える566種が確認されており、市街地における小さな緑地が、小型動植物にとって重要な生息・生育環境にあることが分かります。

また、重要種（神奈川県レッドデータブック掲載種）の確認種数は全体で43種が確認されています。このうち、全体の7割を超える32種が樹林地で確認されています。

### (ア) 植物

#### ■「横浜の植物」（横浜植物会、2003年）

「横浜の植物」では、2,052種の植物が確認されています。そのうち、外来種が約3割の677種と非常に多く増えており、特に都市部の中区や西区において外来種の割合が高くなっています。

■表 横浜市の植物の状況

分 類		在来種	外来種	合 計
シダ植物		184種	10種	194種
裸子植物		5種	6種	11種
単子葉植物		372種	163種	535種
双子葉植物	離弁花類	514種	284種	798種
	合弁花類	300種	214種	514種
合 計		1,375種	677種	2,052種

「横浜の植物」（横浜植物会、平成15年）より



■「横浜の源流域環境」（横浜市環境科学研究所、2009年）

市内5河川の源流域で調査を行った結果、848種類の植物が確認されています。うち重要種が76種（ミズニラ、タコノアシなど）、特定外来生物が4種（ポタンウキクサ、アレチウリなど）確認されています。

「横浜の植物」による在来種の種数と単純に比較してみても、約50%の在来種が源流域に生育していることとなり、横浜における重要な生育環境になっているといえます。

■「横浜のレッドデータ植物目録」（神奈川県立博物館研究報告、北川・田中、2004年）

絶滅種205種及び絶滅の危険のある種350種をあわせた555種が希少種となっており、これは横浜市に生育する植物種の27%にも達しています。絶滅した植物としては、水辺湿地性の種が多く含まれていることが特徴の一つにあげられます。

この数十年間の人口増加による開発や荒廃した樹林地の増加により、残念ながら横浜から姿を消してしまった植物も多くある一方、樹林地の適切な管理により、ヤマユリやキンランなど、これまであまり見られなくなっていた植物が再び姿を見せてくれる事例もあります。今後も、横浜の植物が失われないよう、また再生させていけるよう取り組む必要があります。

(イ) 動物

[哺乳類][鳥類]

■「横浜市陸域の生物相・生態系調査」

哺乳類では、ホンドタヌキやホンドアカネズミ、アズマモグラなど合計7種が確認されています。横浜は標高が低く、山地性の哺乳類は元々少なかったと考えられますが、明治以降の急激な都市化によって、その個体数は減少したと考えられています。ただし、アブラコウモリやカヤネズミについては、個体こそ確認されなかったものの、聞き取り調査では増加が確認されていることから、公園の環境整備等が小型哺乳類の生息環境の創出に役立っている可能性があります。外来生物については、アライグマやタイワンリスが確認されています。

鳥類では、樹林を好むオオルリやヤマガラ、ルリビタキから、都市適応型のスズメやヒヨドリ、キジバトまで、合計65種の鳥類が確認されています。

■横浜自然観察の森における調査

市内最大の緑地である円海山地区（約450ha）の一角を占める横浜自然観察の森（栄区、約45ha）では、哺乳類16種、鳥類140種、爬虫類14種が確認されており、横浜の郊外部の大規模な緑地は、生物の貴重なすみかになっていることがわかります。

■「横浜の源流域環境」

哺乳類は6種、鳥類は85種が確認されています。うち、重要種は哺乳類は確認されず、鳥類は40種（アオジ、ツミ、タシギなど）が確認されています。また、特定外来生物については、哺乳類は1種（アライグマ）、鳥類は1種（ガビチョウ）が確認されています。

近年、大きく減少したといわれているのは、主に草地に生息するヒバリやホオジロ、水田のカエルやヘビを食べるサシバ、ヨシ原に生息するオオヨシキリ、水田、川辺、海岸に生息するコサギなどであり、開発による土地利用の変化により、こうした鳥たちの生息する場所が失われたり変わってしまったことが大きな原因と考えられます。

一方、1980年代以降、家庭への下水道の普及や工場からの排水の規制等により河川の水質が大幅に改善され、多くの魚が戻ってきたことで、カワウやアオサギのような水辺で採餌する鳥については、数が増えているものもあります。また、生態系の頂点に立つ猛禽類のオオタカや、キツツキの仲間として広く親しまれているコゲラなども都市部の樹林地などで比較的数を増やしているといわれています。

#### [両生類・爬虫類]

##### ■「横浜市陸域の生物相・生態系調査」

両生類は、アズマヒキガエルやニホンアマガエルなど合計5種、爬虫類はアオダイショウやヤマカガシなど合計5種が確認されています。カエル類については、格好の産卵場所である水田の減少や乾田化等により生息数を減らしており、特にトウキョウダルマガエルが姿を消した地域は多くなっています。

爬虫類は、石垣のコンクリート化等によりトカゲが著しく減少したほか、マムシやヒバカリ等のヘビ類も減少しています。

##### ■「横浜市陸域の生物相・生態系調査」

両生類は6種、爬虫類は11種が確認されています。うち、重要種は両生類は4種（アズマヒキガエル、シュレーゲルアオガエルなど）、爬虫類は6種（ニホントカゲ、シマヘビなど）が確認されています。また、特定外来生物については、両生類で1種（ウシガエル）が確認されています。

#### [昆虫類]

##### ■「横浜市陸域の生物相・生態系調査」

ミズイロオナガシジミやオオミドリシジミなど、合計267種の昆虫類が確認されています（陸域調査では昆虫類はチョウ類、セミ類、トンボ類を主として調査）。横浜（鶴見川河川敷）にしか生息しないヨコハマナガゴミムシという珍しい昆虫も確認されています。

確認種数は全体的に減少しており、例えば雑木林でよく見られるオオムラサキやミヤマクワガタ、雑木林・栗畑に多くいるシロスジカミキリ、草地にいるヒメシロチョウ、ツマグロキチョウなどは横浜からほぼ姿を消したか、あるいは失われてしまっています。これは生息・生育環境の悪化、喪失による衰退が主な原因と考えられています。

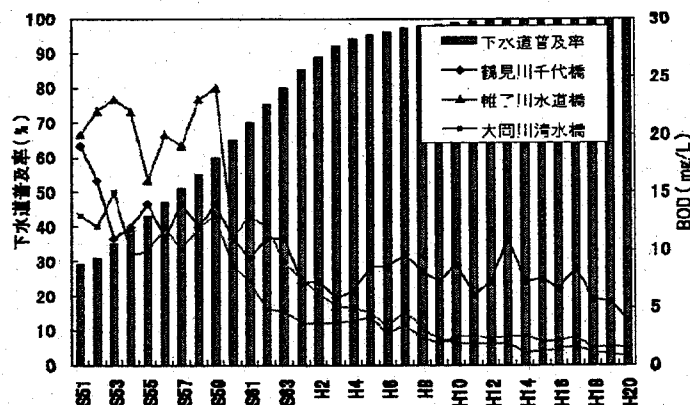
##### ■「横浜市陸域の生物相・生態系調査」

トンボ類では31種、チョウ類では51種、その他の昆虫では289種が確認されています。うち、重要種はトンボ類では10種（ヤマサナエ、マユタテアカネなど）、チョウ類では1種（ミドリシジミ）、その他の昆虫では10種（オナガササキリ、アカマダラハナムグリなど）が確認されています。また、特定外来生物については、確認されませんでした。

## (2) 河川の生物

魚類については、1980年代以降、下水道の整備や工場からの排水規制等により河川の水質が大幅に改善されたことにあわせて、かつて横浜の川で見られた多くの魚たちが戻ってきています。

■図 下水道普及率とBOD



1980年代以降、水質 (BOD、水が汚いほど値が大きい) は大幅に改善され、様々な生物が戻ってきた

### ■「横浜の川と海の生物(河川編：第12報)」(横浜市環境科学研究所、2009年)

魚類では48種、底生動物は172種、水草は7種が確認されています。

市内の河川の源流域から上流域は、水質が大変きれいなところに生息するといわれるアブラハヤやサワガニなどが多くおり、また、今では、市内のほとんどの川でアユが産卵を行い回遊していることも確認されています。

### ■「横浜市陸域の生物相・生態系調査」

魚類では15種、甲殻類では5種が確認されています。うち、重要種は魚類では8種(ホトケドジョウ、アブラハヤなど)確認され、甲殻類では確認されませんでした。また、特定外来生物については確認されていません。

横浜の中・下流域の護岸のほとんどはコンクリートで固められていますが、源流域(上流域)では、今でも自然の状態が残されている区間もあります。源流域の比較的広い範囲に、ゲンジボタルや重要種であるホトケドジョウなどが生息しており、横浜に自然状態の良好な水環境が今も継続して残っていることを示しています。

今後もそうした環境を大切に守っていくとともに、魚が行き来できるよう河川の落差をなくしたり、田んぼ脇に魚道を作ったりするなど、生き物のすみかや範囲にも配慮した取組を進めていく必要があります。

### (3) 海の生物

横浜の沿岸域では、沿岸漁業や海苔の養殖が盛んであった時期があり、マグロのような大型魚類を除けば多くの魚が漁獲され、干潟においてもアサリに混じってハマグリが獲れた時期もありました。また、沿岸域においてアマモ類は 1980 (昭和 55) 年ころには消失傾向にありましたが、近年は市民活動による再生が進められています。

#### ■「横浜の川と海の生き物 (第 12 報：海域編)」(横浜市環境科学研究所、2010 (平成 22) 年)

沿岸域調査によると、今もキスやアジの他、マダイやハゼ類、カレイ類など、河口・海岸域(野島水路など計 5 か所)では 27 種、内湾(横浜港沖など計 3 か所)では 35 種の魚類が確認され、干潟については平潟湾と金沢湾でゴカイやエビ、カキなどで計 58 種の生物が確認されています。

### (4) 外来生物の状況

市内では、近年、外来生物(人間によって持ち込まれた海外起源の生物)が逃げ出したり放たれることで野生化し、生態系や人間、農作物へ被害を及ぼすケースが生じています。

このような被害を及ぼす種のうち、特に影響が大きいと考えられる生物は、外来生物法によって「特定外来生物」または「要注意外来生物」として指定されており、対策をとることが求められています。

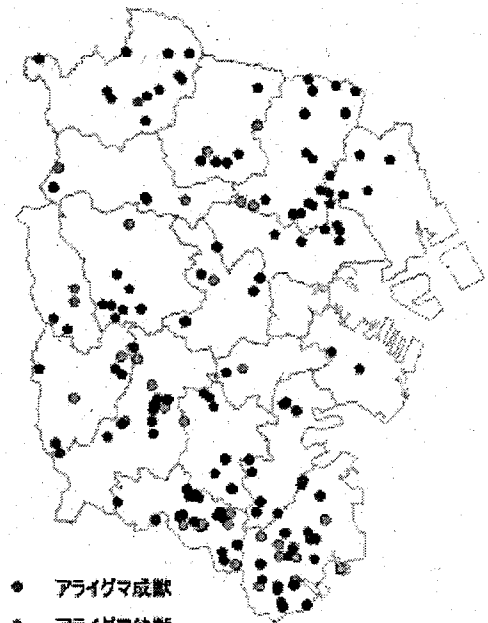
特定・要注意外来生物のうち、「横浜市陸域の生物相・生態系調査」で確認されたのは植物 26 種(アレチウリ等)とウシガエルでしたが、他の調査や目撃情報等を含めると、ガビチョウ、アライグマ、タイワンリス、ミシシippアカミミガメも確認されています。

また、指定を受けていない外来生物(アオマツムシ、ブタクサハムシ等)についても、各地でその生息が確認されています。

そのうち、特定外来生物に指定されたアライグマについては、生活被害対策として捕獲を実施していますが、こうした外来生物も市域全体に生息していることがわかります。

\*在来種か外来種か見解の分かれているハクビシンについても、生活被害対策として捕獲を実施しています。

■図 横浜におけるアライグマ・ハクビシン捕獲マップ(2007 年度)



- アライグマ成獣
- アライグマ幼獣
- ハクビシン成獣
- ハクビシン幼獣
- ▲ 農業被害・その他(アライグマ成獣)

■表 横浜市陸域の生物相・生態系調査（平成11年度）における確認種数一覧

分類	区分	確認種数				
		全域	緑被区分別			
			樹林地	農地	草地	市街地
哺乳類	普通種	7	5	1	0	2
	重要種	0	0	0	0	0
	外来生物 (特定・要注意)	0	0	0	0	0
	合計	7	5	1	0	2
鳥類	普通種	42	36	30	25	25
	重要種	23	18	9	10	9
	外来生物 (特定・要注意)	0	0	0	0	0
	合計	65	54	39	35	34
両生類	普通種	2	2	1	1	1
	重要種	2	2	0	0	0
	外来生物 (特定・要注意)	1	1	0	0	0
	合計	5	5	1	1	1
は虫類	普通種	3	3	2	0	1
	重要種	2	2	1	1	1
	外来生物 (特定・要注意)	0	0	0	0	0
	合計	5	5	3	1	2
昆虫類	普通種	259	207	65	73	122
	重要種	8	5	0	3	1
	外来生物 (特定・要注意)	0	0	0	0	0
	合計	267	212	65	76	123
植物	普通種	663	495	260	277	381
	重要種	8	5	0	3	3
	外来生物 (特定・要注意)	26	15	14	19	20
	合計	697	515	274	299	404
全分類	普通種	976	748	359	376	532
	重要種	43	32	10	17	14
	外来生物 (特定・要注意)	27	16	14	19	20
	合計	1,046	796	383	412	566

注1: 重要種は、神奈川県レッドデータブック掲載種を集計

注2: 横浜市陸域の生物相・生態系調査の環境区分と緑被区分の関連は、以下のとおり。

樹林地: 落葉広葉樹林、常緑広葉樹林、竹林



## コラム 生物多様性の危機とは

近年、世界的な問題となっている生物多様性の危機については、下記のように定義されています。

### (1) 人間活動や開発等、人が引き起こす負の要因による危機

開発による生息・生育地の減少や環境の悪化、珍しいものの乱獲や盗掘が今も続いています。横浜でも、高度経済成長期に都市化が進み、樹林地や農地などの緑地が大幅に減少しました。この結果、食物連鎖の頂点にいる猛禽類（サシバ等）などの高次の捕食性動物が少なくなりました。これは、猛禽類の餌となる昆虫や小動物などの個体数が少なくなったのと同時に、それらの生物の生息空間である緑地が著しく減少してしまったことを示しています。

### (2) 自然に対する人間の働きかけが縮小することによる危機

一つ目の危機とは逆に、自然に対する人間の働きかけが減ることによる影響です。かつては、薪や炭、屋根葺きの材料などを得る場であった里山や草原が利用されなくなった結果、その環境に特有の生き物が危機に瀕しています。

一方、横浜のような大都市ではこの問題とは別に、「緑の10大拠点」や「市民の森」などがレクリエーションの場として活用されるようになると、人口の多さから過度な管理（下草刈りの行いすぎ）、踏圧や重要植物の盗掘が生じるなど人による圧力が顕著になってきました。こうした2つの危機の混在は、横浜ならではの特徴といえるでしょう。

### (3) 外来種や化学物質などを人が持ち込むことによる生態系のかく乱

国内の他の地域から持ち込まれたものも含め、ブラックバスやマングースなどの外来種は、もともと生き物を食べたり、生息・生育場所やエサを奪ったり、近縁種と交雑し遺伝的なかく乱をもたらすなど、地域固有の生態系を脅かしています。

横浜でも、人によって持ち込まれたブラックバス、ブルーギル、アライグマ、タイワンリス、オオブタクサ、アレチウリなどの外来生物が数多く生息・生育していることが生態系のかく乱につながっています。

加えて、横浜市では、生物多様性の観点から重要な意味をもつ谷戸環境についても危機的な状況にあるといえます。

### (4) 谷戸風景の消失と伝統文化の継承の希薄化

谷戸環境は、湧水・湿地、ため池、水路から谷戸田へと水が流れる構造となっていて、谷戸の周縁部の樹林も含め、様々な動植物にとって貴重な生息・生育空間が形成されています。しかしながら、谷戸環境は、そうした生物の生息・生育空間としての意味だけではなく、人の暮らしがあったからこそ培われた歴史と文化の伝承される空間として非常に重要な意味を持っています。

また、野鳥のさえずりやカエルの合唱、田んぼで見られる四季折々の景観は、私たち日本人に安らぎと人と自然の付き合い方を考えさせてくれる原風景として大きな価値があります。

このような谷戸環境は、横浜にはあまり残されておらず、大切にしていける必要があります。

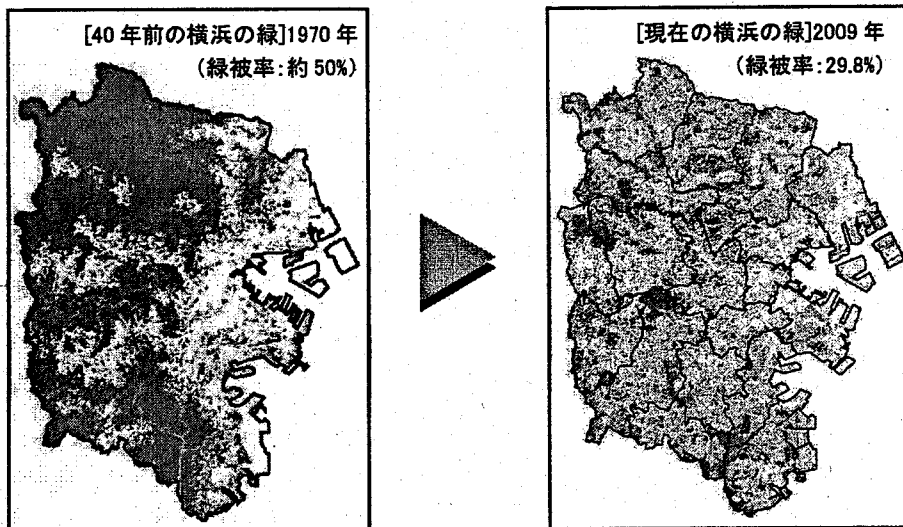
### 3 横浜市における生物多様性の危機の背景・課題

横浜市における生物多様性を取り巻く危機的な状況の背景や課題としては、開発等による生物のすみかの減少や体系的な調査に基づくデータの蓄積の不足や、市民の生活様式や意識の変化などがあります。

#### (1) 開発に伴う土地利用の改変などによる生息・生育場所の喪失・分断化・悪化

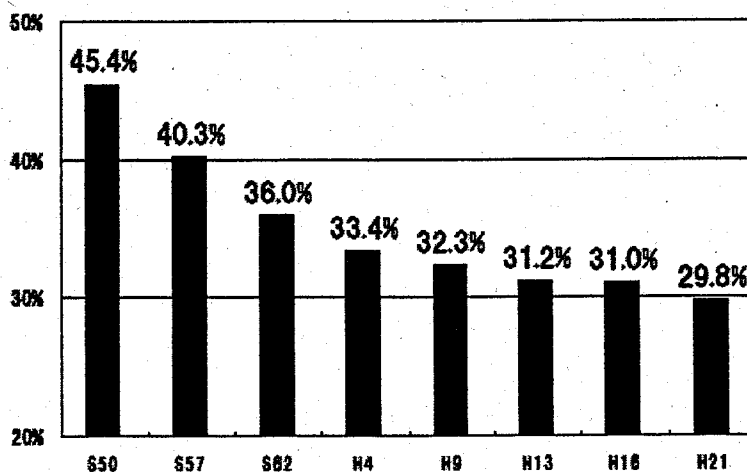
約40年前の昭和40年代の横浜市は人口223万人で、緑は市域の約半分を占めていましたが、その後人口の大幅な増加にともなう宅地開発などにより、2009年（人口367万人）には、約29.8%まで緑が減少しました。

■図 横浜の緑のうつりかわり



※緑被率は、調査年度によって調査手法や精度が異なるため、おおむねの傾向を示したものです。

■図 横浜の緑被率の推移



そうした緑の大幅な減少により、生き物の生息・生育環境が失われた結果、大規模な緑を必要とする猛禽類や草地にすむ鳥類などが大きく数を減らすなど、生息・生育している動植物の種数自体も少なくなっています。また、生息・生育地の孤立化・分断化により、生き物の集団同士のつながり（生態系ネットワーク）も希薄になっています。

緑地だけでなく、生き物の生息・生育環境として重要な水田やため池も、後継者の不足などにより大きく減少しており、そこをすみかとしているカエルやメダカ、ヘビ、そしてそうした水田の生物を捕食するサシバなど肉食の鳥類も見られなくなったり、数を大きく減らしてしまいました。

## **(2) 適切な管理が行き届かないことによる樹林地の荒廃**

薪炭林など生活の中で利用していた雑木林については、生活様式の変化や土地所有者の高齢化など様々な理由により、間伐や枝打ち、下草刈りなどを行わなくなった結果、林縁部がツルで覆われ日が当たらなくなったり、樹木の密度が高くなったりするなど荒廃が進んでいます。また、逆に、下草を刈りすぎたことによる土壌の乾燥化や無計画な伐採などの問題が生じているところもあります。

生物の生息・生育環境の観点からは、その樹林地にあった適切な維持管理を行う必要があります。現在、いくつかの大規模な公園や市民の森では、計画づくりや計画に基づいた維持管理が行われています。今後は、こうした取組を拡大するとともに市域の様々な場所に浸透させていくことが必要となっています。

## **(3) 生物調査データの総合的蓄積の不足**

横浜市の生物多様性を評価するためには、重要種から普通種まで様々な指標種を用いて、計画的・継続的に生息・生育状況を把握する必要があり、継続的なモニタリング調査は必要不可欠ですが、特に陸域における調査については、データの蓄積もあまりなく、調査時期・地点などデータにばらつきがあるため、正確には分かっていない状況です。

様々な主体が実施している生物調査のデータを集約し、利用できるような場所・しくみが存在しないことも課題となっています。

今後は、あらゆる主体が調査に取り組めるしくみをつくとともに、それを集約し共有できるデータベースや機会を整えていく必要があります。

## **(4) 生活の利便性の向上による生活様式や意識の変化**

より便利で快適な生活を追求する社会構造の影響で、私たちの生活様式や自然・生き物に対する認識も大きく変化しています。

例えば、私たちの暮らしに欠かせないきれいな水や空気、そして食糧はすべて自然や生き物からもたらされるものですが、いつでもどこでもすぐに手に入るようになったことで、自然の恵みを感じられる場面や機会が減っているといえます。また、都市部では、自然・生き物に接する場所が少ないことも課題です。

今後は、自然や生き物の大切さを再認識し、そうしたことを感じられる場所や機会を増

---

やしていくことが必要です。

#### **(5) 生物多様性に配慮した取組の不足**

これまで横浜市では、樹林地の保全や緑化の推進、多自然川づくりや農業施策の推進など、自然環境や生き物、伝統文化に配慮した取組が行われてきました。しかし、開発による緑環境の減少やライフスタイルの変化（大量生産・消費）による生物多様性への影響は非常に大きいため、今後はあらゆる分野で総合的に生物多様性に配慮した取組を行っていく必要があります。

## 4 様々な主体による環境活動と市民意識

横浜市は、市民の環境に対する意識が非常に高く、また市民による環境活動も活発であることが特徴です。

また、いくつかの企業において、生物多様性の向上に寄与する様々な取組が進んでいます。

### (1) 市民活動団体・企業など様々な主体による環境活動の状況

#### [市民活動、地域活動]

G30行動の達成に代表されるように、横浜の特徴のひとつとして市民力・地域力の高さを挙げるすることができます。最も身近な活動組織である自治会町内会の加入率は、近年は減少傾向にあるもののいまだ8割弱にのぼり、また、横浜市内のNPO法人登録団体数は、平成22年11月30日現在、1,200を超え、県内のNPO法人の約半分を占めている状況です。

一方、市内で環境活動を行っている団体は、現在把握しているだけで、2,600を超えています。公園や河川・水辺施設、樹林地などでは多くの愛護会が組織され、清掃活動やイベントなどが活発に実施されているほか、環境創造局の環境活動団体リスト「やってみよう」に登録している団体は84にのぼります。

また、都市公園の文化体験施設や自然体験施設では、地域住民等による管理運営委員会やNPO法人等が指定管理を受け、運営を行っています。



[企業による取組]

平成 21 年 3 月に日本経済団体連合会が「生物多様性宣言」を発表するなど、企業の動きは活発となっています。市内でも、本業との関連のなかで蓄積したノウハウを各社が地域のステークホルダーと連携して環境活動や環境教育などに活かすなど、取組が進んでいます。

■表 企業による取組例

①	パナソニック・モバイル コミュニケーションズ	<ul style="list-style-type: none"> <li>・鶴見川での TR ネットと連携した外来種除去・生き物調査。従業員とその家族、友人等と連携し、氷取沢市民の森での保全活動、自社敷地内樹林でのモニタリングと保全活動（小学校と連携）</li> </ul>
②	エバラ食品本社	<ul style="list-style-type: none"> <li>・自社社員にて山梨県笛吹市の山林の一部に植林を行い、森づくりを開始（「エバラの森」）。「エバラの森」への植林を通じ、日本国内の自然豊かな森づくりと生態系保全に貢献している。</li> <li>・神奈川県内の中央研究所では、試作開発で出る生ごみを生ごみ処理機で肥料化し、研究所内の畑に撒いて野菜を作っている。</li> </ul>
③	大成建設本社・技術研 究所	<ul style="list-style-type: none"> <li>・1992年リオサミットを契機に環境報告書作成。1996年には「環境方針」、2010年9月には「生物多様性宣言」を発表。</li> <li>・1990年代から“生態系創出・保全技術”を研究/実践し、2001年竣工の札幌ドームにもこの技術を適用。10年目のモニタリングでは開発前を上回る生き物の種数を確認。</li> <li>・横浜市内にある「技研の森」では指標鳥類の召致を狙った緑化技術により想定した野鳥の呼び込みに成功した。</li> <li>・奥只見ダムでは、電源開発と共にミティゲーションとして湿地を移設。オゼイトトンボ等の保全を行った。</li> </ul>
④	サカタのタネ	<ul style="list-style-type: none"> <li>・複数の資源国政府・関連研究機関と共同で植物資源を探索・評価し、新品種開発と販売を行い、利益の一部などを資源国へ還元することで遺伝資源の保全を行っている。</li> <li>・CO<sub>2</sub>、NO<sub>2</sub>などの吸収・分解による浄化や、高い蒸散性能によるヒートアイランド現象緩和など環境保全に効果のある新品種を商品化している。</li> <li>・本社屋の屋上緑化は14種の低木を混植し刈り込み等手入れを行いこの14年間で上水利用は1回のみでほぼ無かん水で維持している。</li> <li>・(財)日本鳥類保護連盟の提唱する「バードピア」実現の一助として、本社屋上緑化部分などに巣箱、餌場などを設置し、鳥類を含めた生物多様性に配慮。</li> </ul>
⑤	東京電力西火力事業所	<ul style="list-style-type: none"> <li>・「尾瀬・戸倉」、「発電所」などにおいて、多様性に富んだ自然資産の保護・保全・創出につとめ、「東京電力自然学校」という統一した名称の下に、それらを活用したコミュニケーション活動を展開。</li> <li>・横浜火力発電所敷地内でも、とんぼ池（ピオトープ）、緑地を活かした、環境学習への支援、人材育成など広く実施。</li> </ul>

## (2) 市民の環境への意識

平成 22 年 11 月から 12 月にかけて市民 1,000 人を対象に実施した「環境に関するアンケート調査」によると、生物多様性の認知度は、49.7%となっています。平成 22 年 3 月に実施した同様の調査結果（認知度 35.9%）に比べて、かなり認知度が向上しました。これは、平成 22 年 10 月に開催された COP10 の影響が大きいと思われる。

また、「身近な生き物を見ることができる環境を大切と考える」市民の割合は 93.8%（平成 22 年 3 月）、「地域の環境保全活動に参加したい」と考えている市民が半数を超えるなど、市民の環境に対する意識は非常に高いことがわかります。

他にも平成 22 年 3 月、及び 11 月から 12 月にかけて実施したアンケートや平成 22 年に開催した生物多様性関連イベントで市民から募った意見をいくつかご紹介します。

- ・円海山に子どものころから何回も行って親しんでいるので、そういった緑地の保存と、横浜らしいおしゃれな海沿いの景観を整備して行ってほしいです。
- ・横浜市のエコ活動についてあまり知らないことがわかりました。もっと一部の市民ではなく、誰もが参加しやすいような仕組みや制度を作って欲しい。
- ・快適な暮らしを守ること、将来、次世代の環境を維持することのために、環境問題は大切なテーマだと思う。
- ・手を入れなければ守れない自然があることを知りました。竹林、里山等、幸いなことに未だ身近にあります。力を合わせて、ボランティア活動をリードするセミプロを育成する必要があると思います。
- ・仕事を離れた高齢者は、ボランティアをしたい気持ちはあっても、そのきっかけが見つかりにくい。もっと気軽に参加できる体制を作るといいのではないのでしょうか。
- ・限られた予算のなかで、環境のすべてのニーズは満たせないで、費用対効果も考え合わせ、優先順位を決めて、施策を実施すべきかと思う。
- ・横浜は町並みが大切だと思う。都会的な要素と自然との調和した数少ない政令都市だと思うのでそこを大事にして欲しいと思う。
- ・気にはしていますが実際どうしたらいいのか、どのような取り組みをしているのかわからないところが多いので、もっと大々的に発信してほしいなと思いました。
- ・生物多様性の意味が良く分からないと言う人が多いので行政からも PR して欲しい。
- ・私が最近思うことは、もっと学生のうちに環境問題に触れる機会があればいいということです。学校を通じた取り組みや環境教育等が増えれば幼いうちから環境問題に関心を持てる人が増えると思います。
- ・一般的に壊すのは簡単ですが、創るのは困難で時間と知恵が必要。今、自然と人間の関わりが注目されているが、個人として出来ることを積極的に取り組んでいこうと考えています。今日の各種講演を聞いて、行政の重要性を認識しました。
- ・色々なことを考えると、子どもたちの将来、またその子どもたちの未来が不安になります。少しでも環境について目を向け、耳を傾け、日常の中で実践できることから、努めていきたいと思いました。

用語集<生物編>

- あ行 アオサギ サギ科の鳥。全長90~98cm程度。【生息場所】湖畔、沼沢地、水田、川岸、干潟など。夕方は川の中洲などに集まって眠る。【採餌】水生動物など。【特徴】背は青灰色で、頭頸(とうけい)部と下面の大部分は白く、目の後方と長い冠羽は黒い。
- アオジ ホオジロ科の鳥。全長15cm程度。【生息場所】山地帯上部から亜高山帯下部にかけての、比較的乾いた明るい林にすみ、疎林で藪が多いところ、林縁、若木林などを好む。【採餌】種子、果実、昆虫。【特徴】背面は緑褐色で、腹面は黄色。神奈川県では絶滅危惧Ⅱ類。
- アオダイショウ ナミヘビ科の無毒の蛇。全長1.5~2.5m程度。【生息場所】人家付近。【採餌】ネズミなど。【特徴】日本では最大。背面は青みがかった灰緑色で、脱皮前には2~4本の黒い縦線が現れる。神奈川県では要注意種。
- アオマツムシ マツムシ科の昆虫。体長は雄27mm、雌32mm程度。【生息場所】街路樹を中心に分布。幼虫、成虫とも広葉樹上に生息。【特徴】雄は”リーリー”と甲高い調子で鳴く。サクラ、モモ、カキなどの葉を食害する。
- アカマダラハナムグリ コガネムシ科の昆虫。体長14~20mm程度。【生息場所】二次林。【特徴】体色は全体赤褐色で小黑斑を散布し、ロウ状の光沢がある。神奈川県では準絶滅危惧。
- アズマヒキガエル ヒキガエル科のカエル。体長90~150mm程度。【生息場所】低地から標高2,500メートル以上までの林床に広範囲に棲息し、寺や人家の庭にも生息。【採餌】小昆虫など。【特徴】神奈川県では要注目種。
- アズマモグラ モグラ科の動物。体長15cm程度。【生息場所】低地の草原や農耕地など湿潤で土壌の深い平野部。【採餌】昆虫やミミズ類。【特徴】優れた感覚毛である口ひげが発達し、シャベルのような手足で土を掘り、地中にすむ。
- アブラコウモリ ヒナコウモリ科のコウモリ。体長4~5cm程度。【生息場所】人家の屋根裏、瓦の間、戸袋、近代的高層建築の排気孔。【採餌】夕方に飛び回って蚊などの小形の昆虫を捕食。【特徴】体の上面は灰茶色、体の下面は灰黄色、幼獣は黒色を帯びる。
- アブラハヤ コイ科の淡水魚。全長20cm程度。【生息場所】山間の溪流。【採餌】昆虫類、藻類。【特徴】黄褐色で体表がぬるぬるしている。神奈川県では準絶滅危惧種。
- アミメハギ カワハギ科に属する海水魚。全長6cm程度。【生息場所】水深20m以内の内湾の藻場、岩礁域など。【特徴】体色は黄褐色か灰緑色で、暗色の網目状紋様があるのがこの名の由来である。日本のカワハギ類中最も小さい種。
- アライグマ アライグマ科の動物。頭胴長41~60cm程度。【生息場所】湖沼や川に近い森林。【採餌】ネズミや水中の小動物、卵、果実など。【特徴】白色の顔に黒色系のマスクを着けたような外見で4~7の輪模様を尾に持つ。夜間活動する。特定外来生物。
- アレチウリ ウリ科の一年生草本。つる性植物で、長さ数~十数m。【生息場所】林縁、荒地、河岸、河川敷、路傍、原野、畑地、樹園地、造林地など。【特徴】日当たりの良い場所を好み、生育速度が非常に速い。特定外来生物。

イワボタン	ユキノシタ科の多年草。高さ12cm程度。【生息場所】沢沿いのやや暗い湿った場所を好む。【特徴】茎・葉は緑紫色で、早春に淡黄緑色の花を開く。ミヤマネコノメソウの別名。
ウシガエル	アカガエル科のカエル。体長10~20cm程度。【採餌】昆虫やザリガニの他、小型の哺乳類や鳥類、爬虫類、魚類までも捕食。【特徴】日本のみならずアメリカ合衆国でも最大のカエル。食用として世界各地に導入され定着している。特定外来生物。
ウミタナゴ	ウミタナゴ科に属する海水魚。全長25cm程度。【生息場所】岩礁域から内湾の藻場で群れをなして生活。【採餌】小形の貝類や甲殻類を好んで食べる。【特徴】体は卵形で著しく側扁し、体色は鉄青色または銅赤色。
エゴノキ	エゴノキ科の落葉高木。高さ3~10m程度。【生息場所】山野に自生。【特徴】樹皮は濃紫褐色。葉は互生し、卵形で先がとがる。枝の先に白い花が垂れ下がって咲く。実は丸く、果皮の汁はのどを刺激し有毒。
エビネ	ラン科の植物。日本各地に生育する多年生の草本。高さ30~50cm程度。【特徴】地上性のランで、ジエビネ、ヤブエビネと呼ばれることもある。神奈川県では絶滅危惧Ⅱ類。
オイカワ	コイ科の淡水魚。全長15cm程度。【生息場所】湖の沿岸部や川の中下流の平瀬など、浅く開けた水面に生息。本来の生息域は西日本であり、関東には人為的に持ち込まれた。【採餌】付着藻類、水生・陸生の昆虫や浮遊生物など。【特徴】背は暗緑色、腹は銀白色。産卵期の雄には、濃い赤と青の婚姻色や追い星が現れる。
オオタカ	タカ科の鳥。全長は雄50cm、雌56cm程度。【生息場所】平地から山地にかけて森林の多い場所。【採餌】ハト・ヒヨドリなどの中形の鳥や小獣。【特徴】上面は青みがかった灰褐色、下面は白地に黒の横斑がある。神奈川県では絶滅危惧Ⅱ類。
オオミドリシジミ	シジミチョウ科のチョウ。はねの開張40mm程度。【生息場所】平地から低山地域。幼虫の食草は各種のブナ科植物、関東地方周辺ではコナラにつくことがもっとも多い。【特徴】雄の表面は金属光沢を帯びた緑色、雌は黒褐色。裏面の地色は灰白色ないし灰色。
オオムラサキ	タテハチョウ科で最大のチョウ。はねの開張9cm程度。【特徴】色は黒っぽく、雄では前翅に紫色の光沢があり、赤・白・黄色の斑紋が散在。クヌギなどの樹液に集まる。日本の国蝶。神奈川県では準絶滅危惧種。
オオヨシキリ	ウグイス科の鳥。全長19cm程度。【生息場所】日本では夏鳥。主に水辺の近いヨシ原で繁殖。【採餌】昆虫など。【特徴】オリーブがかった黄褐色で、下面は薄茶っぽい白色。淡い眉斑(びはん)がある。神奈川県では絶滅危惧Ⅱ類。
オオルリ	ヒタキ科の鳥。全長16cm程度。【生息場所】低山帯から亜高山帯にかけての山地や丘陵。溪流沿いのよく茂った林、渡りの時期には市街地の公園。【採餌】チョウ、ガ、羽化した水生昆虫など【特徴】雄は頭から上面、尾まで瑠璃色。尾羽には黒色が混じる。腹は白い。高い木の上で朗らかにさえずる。神奈川県では準絶滅危惧種。
オナガササキリ	キリギリス科の昆虫。体長20~23mm程度。【生息場所】明るい草原や林の周辺のササ原。【採餌】イネ科植物など。【特徴】体は明るい緑色で、薄茶色の翅を持つ。神奈川県では要注意種。

か行	カタクチイワシ	カタクチイワシ科に属する海水魚。全長15cm程度。【生息場所】沿岸の表層を回遊。【特徴】背部は暗青色、腹部は銀白色。太平洋沿岸の各地で漁獲される。
	カタクリ	ユリ科の多年草。高さ15cm程度。【生息場所】山地の林。【特徴】花びらは6枚あり、先が反り返る。葉は楕円形で、表面に紫色の斑紋がある。花茎の頂に紫色の花を下向きに1個つける。鱗茎(りんけい)は良質のでんぷんを含む。神奈川県では絶滅危惧IB類。
	カトリヤンマ	ヤンマ科に属する昆虫。体長70mm程度。【生息場所】主に平野部で人家、里山周辺の湿田。【特徴】細身のヤンマで羽化後の個体は全体に淡い汚褐色。神奈川県では準絶滅危惧種。
	ガビチョウ	チメドリ科の鳥。全長は20~36cm程度。【生息場所】渡りはせず定住的で、ヤブに営巣。【採餌】昆虫、果実など。【特徴】羽色は焦げ茶が主体で、比較的地味。大きく、複雑な音色でよくさえずる。特定外来生物。
	カヤネズミ	ネズミ科の動物。体長6cm程度。【生息場所】河原の茅の茂みなど。【採餌】草の種子、イナゴ、バッタなどの小動物。神奈川県では準絶滅危惧種。
	カワウ	ウ科の鳥。全長80~101cm程度。【生息場所】内陸の淡水、河川、湖沼、海上。【採餌】潜水して魚類や甲殻類を捕らえる。【特徴】体全体が黒色で光沢があり、褐色の羽根に黒色の羽縁、嘴は白く、ウミウのように尖っていない。
	カワセミ	カワセミ科の鳥。全長17cm程度。【生息場所】標高900mぐらいまでの河川、湖沼、湿地、小川、用水などの水辺。【採餌】3~7cmぐらいのウグイ、オイカワ、ザリガニ、エビ、カエルなど。【特徴】頭が大きく、嘴は黒色で長い。お腹が橙色。頭から背中が光沢のある青緑色。目の後ろが橙色。足は赤い。雌は下くちばしが赤。水に飛び込んで魚を捕って食べる。
	カワニナ	カワニナ科の巻き貝。殻高4cm程度。【生息場所】川などにすみ、水底をほう。【特徴】貝殻は細長の円錐形で、ふつう頂部が失われる。蛍の幼虫の餌。
	カワヨシノボリ	ハゼ科の淡水魚。全長6cm程度。【生息場所】川の上流域から中流域。【採餌】雑食性で底生小動物や水生昆虫、付着藻類など。【特徴】海へは下らず川の中だけで一生を送る。
	カンムリシロムク	ムクドリ科のバリ島の固有種。全長25cm程度。【生息場所】インドネシアバリ島の「バリ・パラト自然保護区」の一部のみに生息。【採餌】虫などの小動物や果実など。【特徴】近年の生息地の開発とその美しい羽色ゆえに飼鳥として乱獲されたことから激減。
	キジバト	ハト科の鳥。全長32~35cm程度。【生息場所】畑地と周辺の集落、雑木林に多い。【採餌】落ちている種子、果実など。豆類やムカゴなどを好む。【特徴】体はぶどう色がかった灰褐色。羽の縁は赤褐色と灰色で首には青と黒の斑がある。羽のうろこ模様が特徴。
	キセキレイ	セキレイ科の鳥。全長20cm程度。【生息場所】低地、低山帯に多く、亜高山帯から高山帯。小さな水路から大きい川、溪流、清流の多い集落を好む。【採餌】昆虫類、ハエ類、カゲロウ類など。【特徴】顔は灰色で、眉斑、顎線は白い。喉は黒い。三列風切の内弁の縁は白い。下面は黄色で脇は白っぽい。足は薄いピンク色。嘴は黒い。神奈川県では減少種。



ギンポ	ニシキギンポ科の海水魚。全長20cm程度。【生息場所】沿岸域。【特徴】体は細長く、側扁し、頭は小さい。東京地方では春にとれるものをてんぷらにする。
キンラン	ラン科の多年草。高さ50cm程度。【生息場所】低山の木陰に生える。【特徴】葉は互生し、披針形で粗い縦じわがある。春、黄色の花を総状に10個ほどつける。神奈川県では絶滅危惧Ⅱ類。
クサフグ	フグ科に属する海水魚。全長15～25cm程度。【生息場所】河川にも入り、砂に潜る習性がある。【特徴】体の背側は灰青緑色で多数の小白点円点が散在し、腹側は白い。卵巣、肝臓、腸に猛毒があり、皮膚に強毒、肉と精巣に弱毒がある。
クヌギ	ブナ科の落葉高木。高さ15m程度。【生息場所】山野に多く、雑木林のおもな林木。【特徴】葉は長楕円形で縁にぎざぎざがある。球状のどんぐりがなる。炭材として使われた。
クロダイ	タイ科の海水魚。全長40cm程度。【生息場所】日本各地の沿岸に分布。【特徴】体色は暗灰色でマダイに似る。性転換をし、全長20cm程度までは雄で、成長するにつれて雌になる。
ゲンジボタル	ホタル科の昆虫。体長1.5cm程度。【生息場所】幼虫は清流など。【採餌】幼虫はカワニナ。【特徴】全体が黒く、前胸背面は淡赤色で中央に細い黒条がある。
コアシサン	カモメ科の鳥。全長22～28cm程度。【生息場所】日本では夏鳥として本州以南の各地で繁殖。大きな砂州、砂浜に営巣する。【採餌】主に体長10cm以下ぐらいの魚。【特徴】白く、頭頂から後頭と過眼線は黒色。体上面は青灰色。喉、体下面は白色。嘴は黄色で先端は黒い。足は橙黄色。神奈川県では絶滅危惧Ⅰ類。
ゴカイ	ゴカイ科の環形動物。体長5～12cm程度。【生息場所】河口や内湾の泥底に生息。【採餌】ゴカイは雑食性で小さな動物や海藻を食べるほか、砂粒を飲み込み、表面についている微小生物を消化する。【特徴】体はひも状。釣りのえさにする。
コゲラ	キツツキ科の鳥。全長15cm程度。【生息場所】低地や低山帯の樹木の多い所。【採餌】昆虫の幼虫や成虫。ハゼ、ミズキ、ウコギなどの実。【特徴】頭部は褐色で、眉斑や顎線、喉は白い。背と翼は黒褐色で小さい斑がある。白斑は背中では横に並ぶ。下面は白色で褐色の縦斑。枯木に雌雄で樹洞を掘って巣(10mくらいまでの高さ)を作る。
コサギ	サギ科の鳥。全長55～65cm程度。【生息場所】低地、山地の水田、湖沼、河川などの水辺。樹林地に集団ねぐらを形成。【採餌】魚類、甲殻類など主に水生生物。【特徴】全身白色で、くちばしと脚が黒く、指は黄色。頭から2本の白い冠羽。
コメツキガニ	スナガニ科に属するガニ。甲幅1cm程度。【生息場所】内湾の砂泥地の干潟に群生する。【特徴】はさみで砂泥をすくって口に入れ、有機質だけを食べて残りを団子にする。
さ行 サシバ	タカ科の鳥。全長47～51cm程度。【生息場所】日本には夏鳥として渡来。低山から丘陵の森林に生息し、周辺の水田などの開けた環境で狩りをする。【採餌】へび、トカゲ、バッタ、カエルなど。【特徴】体の上面は赤褐色で頬は灰色、白い眉斑(びはん)がある。体の下面は白地に褐色の横斑がある。神奈川県では絶滅危惧Ⅰ類。

サツパ	ニシン科の海水魚。全長15cm程度。【生息場所】沿海や内湾。【採餌】プランクトン。【特徴】背部は青緑色、腹部は銀白色を帯びている。
シイ	ブナ科の常緑高木。高さ25m程度。【特徴】葉は表面は濃緑色で裏面は銀灰色から銀褐色に変わり、光沢が強く、全縁または上半部に鈍い鋸歯(きよし)がある。果実のドングリは椎の実と呼ばれ食べられる。市内の潜在食性の代表種。
シギ	シギ科の鳥の総称。【生息場所】干潟や水田など。【採餌】貝・カニ・ゴカイなどを食べる。【特徴】日本では渡りの途中の春と秋にみられる。胴・くちばしが長い。
シジュウカラ	シジュウカラ科の鳥。全長15cm程度。【生息場所】平地・山地の林・都会の公園など。【採餌】クモ類、植物の種子、果実など。【特徴】頭が黒く、ほおが白い。背は暗緑色で、白い腹に黒い太線がある。
シマヘビ	ナミヘビ科のヘビ。全長1~1.5m程度。【生息場所】平地から低山地の水辺、草原、耕地、森林周辺など。【採餌】カエル・トカゲ・ネズミ・小鳥など。【特徴】体は褐色で4本の黒褐色の縦縞がある。神奈川県では要注意種。
シャコ	シャコ科の甲殻類。体長15cm程度。【生息場所】浅海の泥底に生息。【採餌】小魚、エビ、カニ、ゴカイなどを捕食。【特徴】エビに似るが、平たく、腹部が幅広い。鮭ダネとして有名。市内では金沢区で水揚げされる。
シュレーゲルアオガエル	アオガエル科のカエル。体長4~6cm程度。【生息場所】水田周辺など。【特徴】体色は黄緑色から暗褐色まで変化するが、斑紋は現れない。神奈川県では要注意種。
ジョウビタキ	ヒタキ科の鳥。全長14cm程度。【生息場所】農耕地周辺、河原、明るい林、市街地など。【採餌】昆虫、果実など。【特徴】雄は頭が灰色、顔と背が黒く、腹・腰・尾が赤褐色。雌は茶色。翼に白斑があるので紋付き鳥ともいわれる。
シラカシ	ブナ科の常緑高木。高さ20m以上に達する。【特徴】葉はやや細長く、裏面は灰白色。秋にどんぐりがなる。
シロスジカミキリ	カミキリムシ科の昆虫。体長5cm程度。【特徴】黒色の地に白い不規則な条紋がある。日本最大のカミキリムシ。神奈川県では要注意種。
スタジイ	ブナ科の常緑高木。高さ25m程度に達する。【特徴】葉は広楕円形で先がとがる。日本の暖帯林の極相種となる。実はどんぐりで食用。
た行 タイワンリス	リス科の動物。頭胴長20~22cm程度。【生息場所】森林、二次林、耕作地、公園など。【採餌】果実、種子、芽、昆虫など。【特徴】背面は黒と黄土色の霜降り模様。特定外来生物。
タコノアシ	ユキノシタ科(ベンケイソウ科とする見解もある)の多年草。高さ30~80cm程度。【特徴】茎はまっすぐに伸びて、先のとがった細い葉をつける。夏、茎の先に黄白色の小花を多数つけ、蛸の足状に見える。
タシギ	シギ科の鳥。全長27cm程度。【生息場所】水田や湿地・河原など。【採餌】ミミズや昆虫。【特徴】茶褐色で斑紋があり、くちばしはまっすぐで長い。神奈川県では注目種。
タブノキ	クスノキ科の常緑高木。高さ10~15m程度。【特徴】葉は長楕円形で厚い。葉を蚊取り線香に、樹皮を線香や染料に利用する。

チチブ	ハゼ科の魚。全長15cm程度。【生息場所】河口の汽水域に多く、中・下流の淡水域にも生息。【採餌】底生の小動物。【特徴】体は黒い。単独で底生生活を送る。
チドリ	チドリ科の鳥の総称。【生息場所】海岸地域や平野、山地など。【採餌】貝・カニ・ゴカイなど。【特徴】日本では渡りの途中の春と秋にみられる。胴・くちばしが短い。
ツマグロキチョウ	シロチョウ科のチョウ。はねの開張37mm程度。【採餌】幼虫の食草はマメ科のカワラケツメイ。【特徴】全体が黄色で前翅の外縁に黒色帯がある。神奈川県では絶滅。
ツミ	タカ科の鳥。全長30cm程度。【生息場所】低山の林。【採餌】主に小鳥など。【特徴】雄の上面は青灰褐色、下面は白くて胸側からわきは橙褐色、雌は上面が灰黒褐色、下面は白く横斑がある。神奈川県では絶滅危惧Ⅱ類。
トウキョウダルマガエル	アカガエル科のカエル。体長6cm程度。【生息場所】平野部の水田周辺。【採餌】小昆虫など。【特徴】神奈川県では絶滅危惧Ⅱ類。
ドロメ	ハゼ科の海水魚。全長13cm程度。【生息場所】岩礁海岸の潮だまりなど。【採餌】ゴカイ類、小形の甲殻類などの小動物および緑藻類。【特徴】暗褐色で白斑が多数散在。
な行 ニホンアカガエル	アカガエル科のカエル。体長は雄34~63mm、雌43~67mm程度。【生息場所】平地から丘陵地の雑木林の林床、水田など。【採餌】小昆虫など。【特徴】体色は赤褐色。神奈川県では絶滅危惧Ⅱ類。
ニホンアマガエル	アマガエル科のカエル。体長30~40mm程度。【生息場所】平地や丘陵地。【採餌】小昆虫など。【特徴】黄緑色で、雲形の斑紋があるが、かつ色から灰かつ色まで色が変わる。黄色や白色のアルビノ、青色の色彩変異個体も知られる。
ニホントカゲ	スキンク科のトカゲ。全長20~25cm程度。【生息場所】海岸付近から山地までの草地、山道、堤、庭先。【採餌】昆虫、クモ、ミミズなど。【特徴】黄褐色で、全身がなめらかな鱗で覆われている。
ヌカエビ	ヌマエビ科のエビ。体長3cm程度。【生息場所】河川、湖沼、灌漑用水など。泥底質で水草がある場所を好む。【特徴】黒褐色または青褐色。
ノコギリシダ	イワデンダ科の常緑多年草。高さ30~80cm程度。【特徴】山地林下の陰湿な地上に群生。鋭く規則的な鋸歯(きよし)が特徴。
ノスリ	タカ科の鳥。全長50~60cm程度。【生息場所】平地から亜高山の林。付近の荒地、河原、耕地、干拓地で狩りをする。【採餌】ネズミ、カエル、ヘビ、昆虫、鳥。【特徴】幅の広い翼と短い円形の尾をもった中形のタカで、体の上面は褐色、下面は淡褐色で、わきは黒褐色。神奈川県では絶滅危惧Ⅱ類。
は行 ハクセキレイ	セキレイ科の鳥。全長20cm程度。【生息場所】低地の海岸地方、河川、湖沼などの水辺。冬季は平地にも見られる。【採餌】主食は昆虫、繁殖期にはカゲロウ類。【特徴】尾が長く黒色で、背面と胸は灰黒色。尾を上下に振り、飛ぶときは波形を描いて飛ぶ。
ハクビシン	ジャコウネコ科の動物。頭胴長は50~70cm程度。【生息場所】平地や山地の林、果樹園や畑地の周辺など。【採餌】雑食性。ネズミ、昆虫、カニなどから果実、木の葉や茎など。【特徴】体は褐色。額から鼻すじを通る白帯がある。夜行性。

ヒバカリ	ナミヘビ科の爬虫類。全長40～65cm程度。【生息場所】森林の水辺など。【採餌】カエル、魚、ミミズなど。【特徴】背面の色彩は淡褐色や褐色。神奈川県では準絶滅危惧種。
ヒバリ	ヒバリ科の鳥。全長17cm程度。【生息場所】牧場、草原、河原、農耕地、埋立て地。【採餌】草の実や昆虫。【特徴】体は黄褐色の地に黒い斑、頭に短い冠羽。尾の両側は白色。雌雄同色。神奈川県では減少種。
ヒメシロチョウ	シロチョウ科のチョウ。はねの開張40mm程度。【採餌】幼虫の食草はマメ科のカワラケツメイ。【特徴】全体に白く、前翅(まえばね)の先に黒紋がある。神奈川県では絶滅危惧IB類。
ヒヨドリ	ヒヨドリ科の鳥。全長14～28cm程度。【生息場所】低地の樹林。庭木の多い人家周辺、樹木の多い公園などでも繁殖。【採餌】夏は昆虫、冬は果実や種子。【特徴】尾羽は長めで、色彩は多くの種が黄緑色系ないし灰褐色系、雌雄同色。
ブタクサハムシ	ハムシ科の昆虫。体長5mm程度。【採餌】ブタクサ、オオブタクサのほか、オナモミ類などキク科植物。
ヘイケボタル	ホタル科の昆虫。体長8mm程度。【生息場所】幼虫は水田、池など。【採餌】幼虫はヒメモノアラガイ、カワニナなど。【特徴】成虫は淡紅色の前胸中央に太い黒の縦帯がある。神奈川県では準絶滅危惧種。
ホオジロ	ホオジロ科の鳥。全長13～23cm程度。【生息場所】集落、農耕地、牧草地などの周辺の藪地、樹林の林縁、雑草と藪の多いところ。【採餌】イネ科、タデ科、マメ科などの種子。雛の餌としてチョウ・ガ類の幼虫やバッタ類など。【特徴】上面が茶褐色で、黒い縦斑。白い眉斑(びはん)。喉は白く胸から脇腹は淡い茶色。
ポタンウキクサ	サトイモ科の多年生水草。【特徴】茎を横にのぼして株を増やし、繁殖力が非常に強い。特定外来生物。
ホトケドジョウ	ドジョウ科の淡水魚。全長5cm程度。【生息場所】流れの緩やかな谷戸の源流域や湧水のある水路など。【採餌】水生昆虫や藻類など。【特徴】背側は黄褐色、腹側は淡色、体側全体に小さな褐色斑(はん)が点在する。神奈川県では絶滅危惧IB類。
ホンドアカネズミ	ネズミ科の動物。体長80～140mm程度。【生息場所】森林、河川敷、水田のあぜや畑。【採餌】葉緑素のない柔らかい植物の根、実、種、昆虫など。【特徴】背面は赤褐色から橙褐色で腹面は白色。
ホンドタヌキ	イヌ科に属するタヌキの日本産亜種。頭胴長50～60cm程度。【生息場所】森林や里山。【採餌】小動物、昆虫、貝類など雑食。【特徴】顔の目の周りに黒い模様がある。
ま行 マハゼ	ハゼ科の海水魚。全長25cm程度。【生息場所】内湾や河口の砂泥底。【採餌】ゴカイ類、小形の二枚貝などの小動物。【特徴】砂色で不明瞭な暗色斑がある。大衆の釣り魚として親しまれている。
マユタテアカネ	トンボ科に属する昆虫。体長35mm程度。【生息場所】平地や丘陵の林など。【特徴】雄は成熟によって腹部が紅色に変ずるが、雌ではオリーブがかかった褐色となるのが一般的。神奈川県では要注意種。
マレーバク	バク科の動物。体長2.2～2.5m程度。【生息場所】密林、藪地、水辺の草地。【採餌】木の葉や草、果実など。【特徴】体の色が黒と白のツートンカラーになっている。

マンダース	ジャコウネコ科の哺乳類のうち、小形の一群の総称。ふつうはインドマンダースを指す。頭胴長45cm程度。【生息場所】森林、サバンナ、砂漠など。【採餌】ネズミ・蛇など。【特徴】毛は柔らかく、暗赤褐色の霜降り状。明治末、沖縄にハブ退治のため移入された。
ミシシippアカミ ミガメ	ヌマガメ科のカメ。背甲長は雄20cm、雌28cm程度。【生息場所】湖、河川、池沼など。【採餌】雑食性。水草の他、魚類、両生類、甲殻類、貝類、水生昆虫や水鳥の死体などを広く摂食。【特徴】頭部の両脇に目立つ赤い斑が見られる。要注意外来生物。
ミズイロオナガシ ジミ	シジミチョウ科のチョウ。はねの開張38mm程度。【生息場所】コナラ林。【特徴】翅の表側は黒っぽい灰色をしている。
ミズニラ	ミズニラ科の多年生のシダ。長さ10~30cm程度。【特徴】流水中や池に生え、ごく短い塊状の根茎が泥底中にあり、葉は線形でニラに似る。神奈川県では絶滅危惧IB類。
ミドリシジミ	シジミチョウ科のチョウ。はねの開張37mm程度。【生息場所】平地から山地までの湿地や雑木林。【特徴】はねは雄では表面が緑色で外縁に黒色の帯があり、雌では黒褐色で前翅中央に紫色部分がある。神奈川県では準絶滅危惧種。
ミヤマクワガタ	クワガタムシ科の昆虫。体長は雄4~7cm程度、雌3.5cm程度。【生息場所】低山から山地の広葉樹林。【採餌】雑木林のクヌギなどの樹液。【特徴】神奈川県では要注意種。
ムギイワシ	トウゴロウイワシ科に属する海水魚。全長7cm程度。【生息場所】沿岸、特に内湾。【採餌】小エビやケイソウなど。【特徴】体はマイワシのように細長くてわずかに側扁する。頭には平行して並ぶ小さい棘がある。
メジロ	メジロ科の鳥。全長12cm程度。【生息場所】平地から山地までの林。よく茂った常緑広葉樹を好む。【採餌】柔らかい木の実、昆虫、サクラ・ウメなどの花の蜜。【特徴】背面が黄緑色、腹面が淡黄色で、目の周りが白い。
モツゴ	コイ科の淡水魚。全長10~13cm程度。【生息場所】湖沼や池、細流の泥底部など。【採餌】浮遊動物、底生動物や水草に付着している藻類、小動物など幅広く摂食。【特徴】体は細長く、口は小さい。イシモロコヤクチボソともよばれる。
モズ	モズ科の鳥。全長20cm程度。【生息場所】全国各地に周年生息。開けた環境を好む。【採餌】昆虫やミミズ、カエルやヘビ、モグラやネズミなど、冬はハゼ、サンショウ、マサキなどの実。【特徴】雄は頭部が赤茶色で目を通る黒い帯があり、背面は灰褐色、下面は淡褐色。雌は全体に褐色。神奈川県では減少種。
や行 ヤマアカガエル	アカガエル科のカエル。体長5cm程度。【生息場所】産卵地として水田、湿地、池など、日当たりの良い浅い止水。非繁殖期には、産卵地周辺の林の林床など。【採餌】小昆虫など。【特徴】体は赤褐色で鼻先から目の後ろに黒い帯状の線がある。
ヤマカガシ	ナミヘビ科の爬虫(はちゆう)類。全長60cm~1.5m程度。【生息場所】水田付近に多い。【採餌】カエル、小鳥など。【特徴】普通、緑色を帯びた褐色ないし暗褐色で、黒・黄褐・赤色のまだら模様がある。有毒。神奈川県では要注意種。



ヤマガラ	シジュウカラ科の鳥。全長14cm程度。【生息場所】低山や平地の林。【採餌】昆虫や果実、種子。【特徴】背面が青灰色、腹面が赤褐色で、頭とのは黒い。人になれやすく、仕込むと神社の前でおみくじを引くなどの芸をする。
ヤマサナエ	サナエトンボ科の昆虫。体長65～71mm程度。【生息場所】里山や低山地の河川上下流域。【特徴】雄の胸部前面の黄色い模様が太いL字型である。神奈川県では要注意種。
ヤマユリ	ユリ科の多年草。高さ1m程度。【特徴】夏に開花。花の直径は20cm程度。山野に自生し、花は白色で内側に赤褐色の斑がある。
ヨコハマナガゴミムシ	オサムシ科の昆虫。【生息場所】鶴見川の河川敷のアシ原に、極めて局地的に生息。【特徴】横浜市に生息する唯一の固有種。神奈川県では絶滅危惧Ⅰ類。
ら行 ルリビタキ	ツグミ科の小鳥。全長15cm程度。【生息場所】暗い針葉樹林、平地や低山の林縁。【採餌】虫やコシアブラなどの小型の果実。【特徴】雄は頭から尾まで上面が青色、雌は緑褐色で尾だけ青色、ともに腹は白く、脇が橙黄色。神奈川県では絶滅危惧Ⅱ類。

用語集作成にあたって、EICネット・大辞泉・日本大百科全書・Yahoo!オンライン野鳥図鑑などを参考にさせていただきました。

**用語集**

あ行 アグリツーリズム	広義には「都市と農村の交流」のこと。実際には農場で休暇を過ごすこと、農業体験を共有し、ふれあいの中で生まれる交流の事。
アシ原 (ヨシ原)	湖沼・河川・海岸などにおいてヨシが群生している場所。
畦	水田と水田との間に土を盛り上げてつくった小さな境。
栄養塩類	海水・陸水中に含まれ、植物プランクトンや海藻などの生物の栄養として必要な物質。
エキサイトよこはま22	横浜駅周辺大改造計画。国際化への対応・環境問題・駅の魅力向上・災害時の安全確保など「国際都市の玄関口としてふさわしいまちづくり」を推進するための指針となる計画。
エコツーリズム	自然や人文環境を損なわない範囲で、自然観察や先住民の生活や歴史を学ぶ、新しいスタイルの観光形態。
か行 崖線 (がいせん)	段丘の縁端に沿って延々と続く崖の様子。
かながわの名産100選	神奈川県のご伝統と風土に培われた、物産(工芸品、加工食品、農林水産品等)の中から神奈川県民の推薦を受けて、かながわの名産と呼ぶに相応しい100の品目を選定したもの。
環境学習農園	児童、生徒等を対象に農家が指導を行う農園。市内に残る農地や農業を次の世代に引き継ぐために、環境学習や食育活動を推進することを目的とした横浜市の施策。
環境基準	環境基本法(1993年)に基づいて、政府が定める環境保全行政上の目標。人の健康を保護し、及び、生活環境を保全する上で維持されることが望ましい基準。
涵養(かんよう)	雨や川の水などが地下に浸透して帯水層に流れ込むこと。「涵」という文字が“浸す”や“潤す”を意味しているため、地下水がジワジワと満たされるようなイメージ。
希少種	生息地が狭域であるなど生息環境が脆弱な種のうち、現在は個体数をとくに減少させていないが、生息地での環境悪化によっては絶滅が危惧される種。(神奈川県レッドデータブック2006年度版より)
旧伊藤博文別邸	金沢区の野島公園の中にある横浜市指定有形文化財。
魚道	魚にとって自然の滝も含めて堰・ダム等の河川横断構造物は移動(回遊)の障害となるため、これらの障害物を越えて魚が遡上したり下ったりできるように人工的に設置する迂回路。
減少種	かつては神奈川県内に広く分布していたと考えられる種のうち、生息地あるいは生息個体数が著しく減少している種。(神奈川県レッドデータブック2006年度版における定義)
源流の森	緑豊かな都市景観を形成し、市民生活に潤いと安らぎを与えているとともに、保水・治水機能の保全と河川の水量の確保に寄与している市街化調整区域内の良好な樹林地について、土地所有者の方にご協力いただき指定することにより、樹林地の保存を図る横浜市の制度。

公園愛護会	公園の清掃・除草等の日常的な管理について、地域の方々を中心に結成している横浜市のボランティア団体。
合弁花類	花の形態による植物の分け方で、花卉が融合している植物の総称。
谷頭(こくとう)	谷の最上流にある急斜部。
国連生物多様性の10年	国連総会で採択された決議で、2011年から2020年を「生物多様性の10年」と位置付け、国際社会が協力して生態系保全に取り組む10年。
さ行 栽培収穫体験ファーム	農家が経営・指導する市民農園。畑の耕耘から種・苗の準備、栽培指導を開設農家が行い、利用者は農家の指導を受けて、本格的な野菜づくり、農作業を体験する横浜市の施策。
里地・里山	都市域と原生的自然との中間に位置し、様々な人間の働きかけを通じて環境が形成されてきた地域であり、集落をとりまく二次林と、それらと混在する農地、ため池、草原等で構成される地域概念。一般的に、主に二次林を里山、それに農地等を含めた地域を里地と呼ぶ場合が多いが、これらの全てを含む概念として里地里山と言われることが多い。
三面コンクリート張り	河川水の流れを円滑にするために、兩岸と河床をコンクリートで覆うこと。
市街化区域	無秩序な市街化を防止し、計画的な市街化を図るため、「都市計画法」により指定された区域区分。市街地として積極的に開発・整備する区域で、すでに市街地を形成している区域、及びおおむね10年以内に優先的かつ計画的に市街化を図るべき区域を指定。
市街化調整区域	無秩序な市街化を防止し、計画的な市街化を図るため、「都市計画法」により指定された区域区分。市街化を抑制すべき区域で、原則的に開発は禁止されている。
自然植生	人間によって伐採や植林などの手が加えられていない植生。
シダ植物	植物の分類群で、初めて維管束をもった陸上性の一群で古生代に出現。世代交代をし、無性世代(孢子体)は根・茎・葉からなり、葉の裏面に孢子囊(ほうしのう)をつけ、孢子をつくる。
市民の森	山林所有者の好意により、市が土地を借りて一般に公開をしている横浜市独自の緑地を保存する制度。
市民の森愛護会	土地所有者の方々や周辺住民等で結成された地域団体で、散策路や広場の草刈り等について横浜市が管理を委託する。
社寺林	神社や寺院の境内の樹林。
準絶滅危惧種	現時点では絶滅危険度は小さいが、生息条件の変化によっては「絶滅危惧」に移行する可能性のある種。
順応的管理	我々の将来予測した状況が多かれ少なかれ外れることを前提に、常に生物の状態をモニターして、その変化に対して、柔軟に対応していく方法。
消費生活推進員	横浜市消費生活条例に基づき、地域における安全で快適な消費生活を推進する人。

縄文海進	縄文早期～前期（約1万～5500年前）に起きた、陸地が沈降するか、または海水準が上昇して、陸地に向かって海が侵入すること。
水田保全契約奨励事業	市民共有の貴重な人為的自然環境として水田を保全するため、一定期間水稲作付けの継続を条件に支援を行う横浜市の施策。
水利施設	田畑の灌漑（かんがい）や飲用・消火などに水を利用するための施設。
ステークホルダー	企業の利害関係者のこと。株主や債権者・取引先・顧客など。地域社会までも含めている場合が多い。
生産緑地	市街化区域内の土地または森林で、環境保全などの目的で生産緑地法により指定される農地・採草放牧地・森林・漁業用池沼など。
生物多様性宣言	日本経済団体連合会が平成21年3月に、生物多様性保全に向けた宣言と行動指針をまとめて発表したもの。
生物付着基盤	浮きにロープなどをぶら下げ、ムラサキイガイなどの貝やカニ、エビなどが住み付くようにするもの。
絶滅危惧種	絶滅の危機に瀕している種で、「絶滅危惧Ⅰ類」、「絶滅危惧ⅠA類」、「絶滅危惧ⅠB類」、「絶滅危惧Ⅱ類」の4段階の категорияがある。
浅海域	海岸線から大陸棚の外縁までの間にあって、大陸棚上の大部分を占める海域のこと。
双子葉植物	被子植物の一群。子葉は一般に2枚で、葉に網状脈をもち、茎には形成層がある。
た行 単子葉植物	被子植物の一群。子葉が一枚の場合が多く、茎は髄をもち、不斉中心柱で、通常形成層を欠き、花の各部分は3の倍数からなる。
多自然川づくり	河川全体の自然の営みを視野に入れ、地域の暮らしや歴史・文化との調和にも配慮し、河川が本来有している生物の生息・生育・繁殖環境及び多様な河川景観を保全・創出するために、河川管理を行うこと。
地産地消	地域で作られた旬の農作物を、その地域内で消費する考え方のこと。季節に応じた栽培であり、遠距離の輸送が必要ないことから、エネルギー消費に伴う二酸化炭素排出が少なく、地域の農業の活性化にもつながる。
TR ネット	鶴見川流域ネットワークキングの略称。鶴見川の水系に沿って自然や都市を学び直し、バクの姿の流域地図を共有しながら流域規模の市民連携をすすめ、《安全・安らぎ・自然環境・福祉重視の川づくり・まちづくり》をとおして、持続可能な未来を開く新しい流域文化の育成を目指す、流域市民団体の交流・連携活動（ネットワーク活動）。
土丹層（どたんそう）	固結度の低い泥岩、洪積層の硬質粘土層。
どんど焼き	正月15日に、門松・竹・注連縄（しめなわ）・書き初めなどを持ち寄って焼き、その火で餅を焼いて食べ、健康と幸福を祈る。

トンボはドコまで飛ぶかプロジェクト	京浜の森づくり事業において、エコアップや緑地拡充の推進を、市民や専門家、立地する企業と連携した取組。平成15年より「トンボはドコまで飛ぶかフォーラム」と協働し、トンボの飛来調査を実施。
な行 二次林	自然林（一次林）が伐採、山火事などによって失われた後、自然に、または人為的に再生した林。
は行 白砂青松（はくしゃせいしょう）	白い砂浜と青い松林。美しい海岸の風景をいう。
初午（はつうま）	2月の最初の午の日。稲荷（いなり）の祭日とされ、稲荷講の行事が行われる。
ビオトープ	生物を意味する「ビオ」と場所を意味する「トープ」を合成したドイツ語で、野生生物の生息空間を意味する。地域計画においては、計画上重要な生物の生息空間の意味で使われる。
彼岸（ひがん）	春分・秋分の日をそれぞれ中日とする各7日間。
ヒートアイランド	都市では高密度のエネルギーが消費され、また、地面の大部分がコンクリートやアスファルト等で覆われているため、水分の蒸発による気温の低下が妨げられ、郊外部に比べ気温が高くなっている。この現象は等温線を描くと都心部を中心とした「島」のように見えるため、これをヒートアイランドという。
富栄養化	海水や陸水中にリンや窒素などの栄養塩が豊富になり、これをもとにして植物プランクトンや海藻類・水草が繁殖し、動物プランクトンや魚貝類が豊かになる現象。限度を超えるとプランクトンが異常繁殖して汚染や腐水化が起こる。
冬水田んぼ	冬の田んぼに水を張り、抑草効果や施肥効果を得て、稲を育てる農法。菌類やイトミミズなどが増えて土地が肥沃（ひよく）になるほか、昆虫・水鳥の生息地を確保し、生態系を保全するなどの効果が見込まれる。
ふるさとの川整備事業	河川本来の自然環境の保全・創出や周辺環境との調和を図りつつ、地域整備と一体となった河川改修を行い、良好な水辺空間の形成を図ることを目的とした国土交通省の事業で国・県・市が実施する。
分水嶺	雨水が異なる水系の方向に流れる境界線。
ま行 水辺愛護会	河川や水辺施設的环境を良好に保ち、市民の皆さんが快適にふれあい、親しむことができるよう、清掃活動等について横浜市が委託している地域団体。
ミティゲーション	開発事業による環境に対する影響を軽減するためのすべての保全行為を表す概念。
緑の10大拠点	樹林地や農地等の自然的環境が連なる横浜市郊外部の、七つのまとまりのある拠点「緑の七大拠点」及び三ヶ所の「河川沿いのまとまりのある農地・樹林地の拠点」の総称。
虫送り	農作物、特に稲の害虫を追い払う日本の伝統行事。たいまつをともしたり、実盛（さねもり）とよぶわら人形を担いだりして、鉦（かね）・太鼓をたたいてはやし、村境まで送って行く。

恵みの里	市民と”農”とのふれあいを通じて、地域ぐるみで農業と農地を残して、農のあるまちづくりを進めるための、横浜市の農業振興施策。
森づくりボランティア	森と市民をつなぐ仕組みとして、緑地の保全を希望する団体を「森づくりボランティア団体」として登録し、土地所有者の協力を得て、緑地で活動ができるよう支援する横浜市の施策。
や行 横浜市環境保全協議会	横浜市商工会議所において、環境保全に関する知識と技術の涵養並びに交流を図るとともに、関係行政機関との連携の下、地域の環境保全・向上に資するため、昭和55年3月に設立。
横浜市みどりアップ計画 (新規・拡充施策)	緑の減少に歯止めをかけ、市民とともに身近な水や緑を保全・創造し、将来にわたって緑の総量と質の維持・向上を図る横浜市の計画。
横浜スマートシティプロジェクト	市民・民間企業・横浜市の連携によりスマートグリッド（情報通信技術によって電力供給者と消費者を結びつけることで従来の集中型電力供給システムの課題を解決することをめざす、次世代送配電システム。）を横浜で構築し、その成功モデルを全国・海外へ展開させる取組。
遊水池	治水対策の一環として、洪水、下水、雨水を一時的に貯留して、出水量が最大になるピーク時の流量を調節する区域。
ら行 裸子植物	種子植物のうち、胚珠がむきだしになっているもの。
リオサミット	1992年にブラジルのリオ・デ・ジャネイロで開催された首脳レベルでの国際会議。人類共通の課題である地球環境の保全と持続可能な開発の実現のための具体的な方策が話し合われた。
離弁花類	双子葉植物を2つに分けた分類群の1つで、主に花卉（花びら）が合着していない（離生する）もののグループ。花卉がないものや、花被（花卉・がく）がないものも含む。
緑化地域制度	緑が不足している市街地などにおいて、一定規模以上の建築物の新築や増築を行う場合に、敷地面積の一定割合以上の緑化を義務づける「都市緑地法」に基づく制度。「都市計画法」における地域地区として市町村が計画決定を行う。
緑地保存地区	緑豊かな都市景観を形成し、市民生活に潤いと安らぎを与えている市街化区域内の身近な樹林地について、土地所有者に協力いただき指定することにより、樹林地の保存を図る横浜市の制度。
緑被率	緑の現状を量的に示す指標の一つ。航空写真によって、空から緑の量をとらえる方法で、おおよその緑の量が把握できる。
礫浜	砂や礫でつくられた海岸を「砂浜海岸」といい、粒の大きさが2ミリ以上の礫が半分以上を占める海岸を「礫浜海岸」という。
英字 BOD	Biochemical Oxygen Demandの略語。有機物による汚れの指標で、水中の微生物が有機物を分解するときに消費される酸素の量。有機性汚濁物が多くなるとBOD値は高くなる。河川における有機物による水質汚濁の指標として用いられている。

COD	Chemical Oxygen Demandの略語。有機物による汚れの指標で、有機物を酸化剤で化学的に分解（酸化）するとき消費される酸化剤に対応する酸素の量。有機性汚濁が多くなると値は高くなる。海域や湖沼における有機物による水質汚濁の指標として用いられている。
G30	平成22年度における全市のごみ排出量を13年度に対し30%削減する「横浜G30プラン」の目標達成に向けた、減量・リサイクル行動。目標を達成し、平成22年度から「ヨコハマ3R夢（スリム）プラン」を策定し、取組を推進している。
MICE	企業等の会議（Meeting）、企業等の行う報奨・研修旅行（インセンティブ旅行）（Incentive Travel）、国際機関・団体、学会等が行う国際会議（Convention）、イベント、展示会・見本市（Event/Exhibition）の頭文字をとった造語。多くの集客交流が見込まれるビジネスイベントなどの総称。
NO <sub>2</sub>	二酸化窒素。一酸化窒素が酸素に触れると生成する赤褐色の気体。
TEEB	The Economics of Ecosystems and Biodiversity（生態系と生物多様性の経済学）の略語。
Y150 ヒルサイドエリア	開港150周年記念イベント「Y150」のよこはま動物園ズーラシアに隣接したエリア。公募で集まった市民スタッフが中心になってイベントなどが開催された。
YES（ヨコハマ・エコ・スクール）	横浜市脱温暖化行動方針の目標達成のため、市民、市民活動団体、事業者、大学、行政などが実施する環境・地球温暖化問題に関連する様々な講座、イベントなどの活動を、「YES（イエス）」という統一的なブランドのもとに市民に提供するもの。
数字 150 万本植樹行動	「横浜市みどりアップ計画」の先導的事業として、今ある緑地を保全する一方で、新しい緑をつくるために、横浜開港150周年の年（平成21年度末）までに、市民・企業・団体と協働して、市内に150万本の木を植えることを目標とした取組で、目標は達成された。



平成 23 年 2 月 発行

編集・発行

横浜市 環境創造局 企画部 企画課

〒231-0017 横浜市中区港町 1-1

電話：(045) 671-2484

FAX：(045) 641-3490